

スタンダード研究会会報

2021 No. 31

2021年5月22日

目次

研究発表要旨

『カストロの尻』のエレーヌの死について	下川 茂 . . .	2
ジュリヤン・ソレルはなぜ撃ったのか — 『赤と黒』を読み直す	杉本 圭子 . . .	5
会員活動報告	. . .	7
編集後記	. . .	7

【研究発表要旨】

第 74 回 (2020 年 12 月 26 日 オンライン開催)

『カストロの尼』のエレーヌの死について

下川茂

1 エレーヌはなぜ死ぬか

『カストロの尼』のエレーヌはなぜ死ぬのだろうか。ジュール宛ての遺書で彼女は次のように書いている。

Stendhal, *L'Abbesse de Castro, Œuvres romanesques complètes* III, édition établie par Yves Ansel, Philippe Berthier, Xavier Bourdenet et Serge Linkès, Gallimard, Pléiade, 2014, p. 134-136. 以下『カストロの尼』の引用は全てこの版により、頁数のみ記す。

Je ne doute point de toi, mon cher Jules ; si je m'en vais, c'est que je mourrais de douleur dans tes bras, en voyant quel eût été mon bonheur si je n'eusse pas commis une faute. Ne va pas croire que j'aie jamais aimé aucun être au monde après toi ; bien loin de là, mon cœur était rempli du plus vif mépris pour l'homme que j'admettais dans ma chambre. Ma faute fut uniquement d'ennui, et, si l'on veut, de libertinage. [...] Je me voyais, à trente ans, vertueuse suivant le monde, riche, considérée, et cependant parfaitement malheureuse. Alors se présenta ce pauvre homme, qui était la bonté même, mais l'ineptie en personne. Son ineptie fit que je supportai ses premiers propos. Mon âme était si malheureuse par tout ce qui m'environnait depuis ton départ, qu'elle n'avait plus la force de résister à la plus petite tentation. T'avouerai-je une chose bien indécente ? Mais je réfléchis que tout est permis à une morte. Quand tu liras ces lignes, les vers dévoreront ces prétendues beautés qui n'auraient dû être que pour toi. Enfin il faut dire cette chose qui me fait de la peine ; je ne voyais pas pourquoi je n'essaierais pas de l'amour grossier, comme toutes nos dames romaines ; j'eus une pensée de libertinage, mais je n'ai jamais pu me donner à cet homme sans éprouver un sentiment d'horreur et de dégoût qui anéantissait tout le plaisir. En te

voyait toujours à mes côtés, dans notre jardin du palais d'Albano, lorsque la Madone t'inspira cette pensée généreuse en apparence, mais qui pourtant, après ma mère, a fait le malheur de notre vie. Tu n'étais point menaçant, mais tendre et bon comme tu le fut toujours ; tu me regardais ; alors j'éprouvais des moments de colère pour cet autre homme, et j'allais jusqu'à le battre de toutes mes forces. Voilà toute la vérité, mon cher Jules ; je ne voulais pas mourir sans te la dire, et je pensais aussi que peut-être cette conversation avec toi m'ôterait l'idée de mourir. Je n'en vois que mieux quelle eût été ma joie en te revoyant, si je me fusse conservée digne de toi. Je t'ordonne de vivre et de continuer cette carrière militaire qui m'a causé tant de joie quand j'ai appris tes succès. Qu'eût-ce été, grand Dieu ! si j'eusse reçu tes lettres, surtout après la bataille d'Achene ! Vis, et rappelle-toi souvent la mémoire de Ranuce, tué aux Ciampi, et celle d'Hélène, qui, pour ne pas voir un reproche dans tes yeux, est morte à Sainte-Marthe.

遺書の冒頭と末尾に書かれた死の理由は、「*si je m'en vais, c'est que je mourrais de douleur dans tes bras, en voyant quel eût été mon bonheur si je n'eusse pas commis une faute*」、*「Hélène, qui, pour ne pas voir un reproche dans tes yeux, est morte*」である。再会したジュールが彼女の「過ち *faute*」、「淫行 *libertinage*」を非難すると考えてエレーヌは死ぬ。

ジュールが活着していると知ったときから、彼女は自殺すると決めていた(132-133)。「罪を犯した *coupable*」(133)自分はジュールに会うことはできない、「私が生きたくないのはジュールが活着しているからです」と彼女は母に言う(133)。

ジュールが活着していると知る前は、エレーヌは母の脱獄計画の成功を待ちわびていたから(130)、彼女が死ぬのは、「罪を犯した」からではなく、それをジュールに非難されるのを恐れたからである。

しかし、ジュールがエレーヌの「淫行」を非難するというのは、エレーヌが考えるほど確かなことなのだろうか。母とコロンナ公の策略と欺瞞によって、ジュールは心変わりし、戦死したとエレーヌは信じていた。彼女が「過ち」を犯したのは、それから十数年後のことである。たとえジュールでも彼女の行為を非難することはできないのではないか。

エレーヌは、なぜ、ジュールが彼女を非難すると確信しているのだろうか。

『恋愛論』に以下のような記述がある。

De l'amour, éd. Xavier Bourdenet, Paris, GF Flammarion, 2014, p.153-154.

[...] je dirais aux pauvres femmes malheureuses par jalousie : « il y a une grande distance entre l'infidélité chez les hommes et chez vous. chez vous cette action est en partie *action directe*, en partie *signe*. Par l'effet de notre éducation d'école militaire, elle n'est signe de rien chez l'homme. Par l'effet de la pudeur, elle est au contraire le plus décisif de tous les signes de dévouement chez la femme. Une mauvaise habitude en fait comme une nécessité aux hommes. Durant toute la première jeunesse, l'exemple de ce qu'on appelle les *grands* au collège, fait que nous mettons toute notre vanité, toute la preuve de notre mérite, dans le nombre des succès de ce genre. Votre éducation à vous, agit dans le sens inverse. » [...] La différence de l'infidélité dans les deux sexes est si réelle, qu'une femme passionnée peut pardonner une infidélité, ce qui est impossible à un homme.

男性には愛情とは無関係な性行為が存在し、そのため、女性は愛する男性の不貞を許すことができるが、女性の性行為には必ず愛情が伴うから、男性は女性の不貞を許すことができない、とスタンダールは主張している。

エレーヌが、再会したジュールが彼女の「淫行」を非難するに違いないと考えるのは、この作者の主張を共有しているためではないだろうか。

2 情熱恋愛とエネルギー

ところで、エレーヌの遺書には気になる箇所がある。聖母への犠牲に関して書かれた「*En te voyait toujours à mes côtés, dans notre jardin du palais d'Albano, lorsque la Madone t'inspira cette pensée généreuse en apparence, mais qui pourtant, après ma mère, a fait le malheur de notre vie*」という箇所である。「*cette pensée généreuse en apparence*」の「一見 *en apparence*」が問題である。この「一見」には、「高邁な考え」そのものに対する疑念が隠されているのではないだろうか。「母に次いで二人の不幸の原因となった」と書かれているが、ジュールの「一見」「高邁な」考えこそ、二人の不幸の真の原因だと作者は示唆しているのではないか。エレーヌの母は、エレーヌはジュールによって処女を失ったと考え、二人の結婚を認めざるを得ないと考えていた。ところが、ジュールの「高邁な考え」のためにエレーヌは処女のままであり、それを知ったエレーヌの母は、策略と欺瞞で二人を騙して別れさせることを決意する。ジュールの「高邁な考え」を作者は彼の聖母信仰から導き出しているが、その一方で、恋人の破瓜を行わないジュールには、情熱のエネルギーが不足していると考えているのではないか。

『カストロの尼』の主人公は、二人とも情熱のエネルギーが十分ではない。エレー

又は母に隠し事ができず、ジュールは父親的保護者コロナ公の願いを拒絶することができない。作品の結末で母が自分を騙していたことを知ったエレーヌは、死によって母の支配を拒否する。しかし、エレーヌの自殺を、「un geste fulminant qui la requalifie, la restitue en un éclair à elle-même et à Jules」とみなすのは（Philippe Berthier, *Notice*, p. 1199）行き過ぎである。エレーヌもジュールも情熱恋愛の高みに達したことは一度もないのだから。

ジュリヤン・ソレルはなぜ撃ったのか — 『赤と黒』を読み直す

杉本圭子

『赤と黒』の末尾で、ジュリヤンがかつての恋人レナール夫人を教会で撃つ場面を、物語の展開からして不自然だ、動機がわからない、とする見方は伝統的にあった。出版当時の書評を見てみると、ジュリヤンを冷酷なエゴイスト、不可解で非現実的な「怪物」的人物として批判する声や、あまりに痛烈な社会風刺や陰鬱な物語世界を問題視する論調が目立つ。いっぽう、正面切って物語の展開に違和感を唱える論者はおらず、わずかに「物語の展開が雑だ」と指摘する書評や、ジュール・ジャンンのように、狙撃から処刑に至るプロセスが性急すぎる、とする論者がいた。犯行の動機については一部の書評で、レナール夫人の裏切りに対する怒り、「復讐」ととらえられており、これは第2巻第36章でジュリヤン自身がマティルドにあてて「復讐しました」と書いている一節と一致する。ジュリヤンがレナール夫人のあらたな告解師に「嫉妬」して犯行に及んだという噂が、ヴェリエールの町でまことしやかにささやかれていたという設定は、小説のモデルになったベルテ事件の細部の反映と考えることができよう。

1850年代のミシェル・レヴィ版全集の発行に伴い、スタンダールの再評価が起こり、イポリート・テーヌからゾラ、ブルジェに至る作家・批評家たちによって、スタンダールはもっぱら「心理洞察家」(psychologue)としての評価を与えられる。彼らの批評においては、ジュリヤンの複雑きわまりない性格の解剖に叙述が割かれ、終幕における狙撃もそうした性格の帰結として見なされ、疑義が呈されることはない。変化が起こるのは、1892年に出たエミール・ファゲの評論においてである。ここでファゲは、狙撃の前後からジュリヤンをはじめ、あらゆる登場人物が突如として「正気を失う」のは奇異であり、ジュリヤンも冷静に構えて待っていれば、ラ・モール氏が折れて結婚を許してくれたらだろうに、と指摘する。ただ、そうしたブルジョワ的な結末

を避けるため、スタンダールはラファルグ事件を利用することを思いついたのであり、その根底には作者の「エネルギー」に対する熱烈な礼賛がある、と。この評論には見当はずれな指摘が多く、ジュリヤンの性格もあまりに一面的にとらえられており、実在の事件に近づけるためにスタンダールが小説の筋をねじまげた、という主張にも同意しがたい。ただ、イヴ・アンセルが指摘するように、後世の批評家や研究者たちがファゲのこうした見解を直接引用はしないがつねに視野におさめて発言している、という可能性はあると思う。

たとえば戦中派のジャン・プレヴォは、『赤と黒』の結末の展開はやはり不自然であり、スタンダールがジュリヤンの出世物語を拒否して、ベルテ事件を便宜的に利用したのはまちがいない、と主張する。実際に起こった事件に依ったからこそ、狙撃前後の場面を細かく書きこむ必要も感じなかったのである、と。ただプレヴォがファゲと異なるのは、スタンダールが実在の事件に近づけるために物語の筋をねじまげた、つまり事件の利用が自己目的化した、ととらえるのではなく、狙撃と収監のあとに待っているジュリヤンの「第二の生」を描くことこそがスタンダールの真の目的であった、としている点である。野心からも虚栄心からも解き放たれて、真の幸福のありかに気づき、今日のことだけを考えてレナール夫人との愛に生きるジュリヤンの姿は、人生の夕暮れにさしかかったスタンダール自身の境地とも重なるのである、と。

『赤と黒』が古典的名作としての地位を固めている現在、小説の結末をめぐる議論が蒸し返されることはない。昨今の文学研究の主要な潮流のひとつに、歴史的視座をふまえた社会学的なアプローチがあると思うが、第2巻第38章にある次の一節は、スタンダールがすでにそうした視点に立って書いていたことを示している。ジュリヤンの失策は、王政復古下において彼が属していた階級にしかできない、特権的な行為だったのである。

彼女 [マティルド] は高慢な性質ながら、社交界では人の心を忠実に描き出す能力とされている、冷めた用心深さをたっぷりと持ち合わせていたので、情熱的な魂においては強烈な欲求にまで高まることのある幸福、すなわちあらゆる用心を軽んじるという幸福を、理解できなかった。マティルドが育ったパリの上流社会では、情熱が用心深さの殻を脱ぐことはほぼない。窓から身を投げる人は、建物の6階住まいということになっている。

【会員活動報告】

杉本圭子

・ Comptes rendus de Stendhal, *Journal du voyage en 1811*, traduction japonaise par Hiroshi Usuda, Tokyo, 2016, Shinhyoron. *Revue Stendhal*, numéro 2, 2021, Presse Sorbonne Nouvelle, p.485-486.

山本明美

・ 匿名本『バイアーノの修道院』：スタンダール進化のすき間，青山ライフ出版，2020年7月28日，337 p. ISBN 978-4-86450-361-7.

・ Akemi Yamamoto, « Bibliographie des études stendhaliennes et mériméennes au Japon 2016-2019 ». *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 24, éd. Eurédit, déc. 2020, p. 321-327.

【編集後記】

お変わりないですかという挨拶が単なる決まり文句ではなく感じられるようになって一年以上たちます。新型コロナウイルスのため2020年は春の例会は中止、冬の例会はオンラインで開催されました。今年も無事に会報を発行することができました。ご協力いただきました先生方、ありがとうございます。一年前にも書いた通り、今後学会や研究会の形式がどうなるのか見通せないですが、どうか来年も会報が続くよう祈っております。(上杉誠)